

廣讚寺

ジャーナル

第184号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30

TEL (052) 411-5301

FAX (052) 411-5341

<E-mail>

matsuoka@kosanji.or.jp

人工知能との会話から

今までは計算しかできなかったコンピューターが、今では人間とほぼ同じように考えることができるようになりました。まさにコンピューターが知能を持つようになったと言っても言い過ぎではないほど発達しました。

最近ではその人工知能とスマートフォンで話すこともできるようになりました。何かを聞けば膨大なデータの中から答えを探し出し瞬時に返答されます。

「人間はどうしたら幸せになりますか？」

と、問いかけてみると、生活リズムを整え食生活に気をつけて、ポジティブな気持ちで日々を過ごすといいでしょう、と返してきました。

「浄土真宗の教えをもとに人間はどうしたら幸せになりますか？」

と、問いかけてみると、自分自身を欠点を否定せず受け入れて、阿弥陀如来の慈悲を信じて念仏を称えることを努めるといいでしょう、と返してきました。

読んでいて、いかにも情報から出た回答だと感じましたが、ここで一つ人工知能から教わりました。

私自身、僧侶として、

仏の教えをもとに本当に生きているのか。いろんな仏教書を読んだり、法話を聞いたりしています。が、人工知能と同じで単に情報として頭にしまっただけで、誰かに聞かれただけで探し出して答えているだけではないか、と。



宿業しゆくごうについて (I)

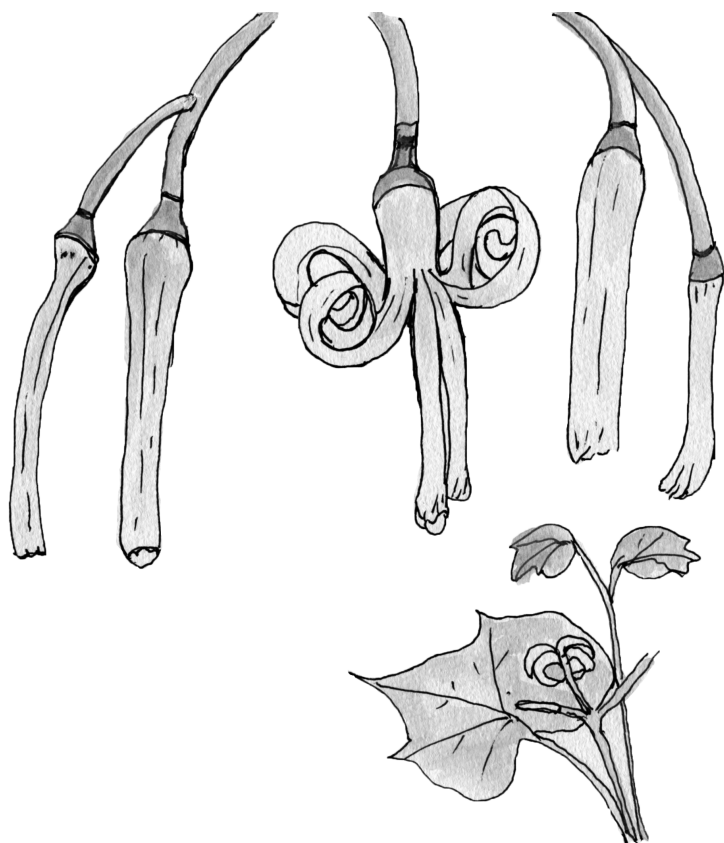
田中智教

先日テレビを観ていましたら、立川談志の「落語とは人間の業の肯定である」という言葉が紹介されました。「業」とは仏教用語であり、端的に言えば「行為」や「造作」を意味し、①身業（身体的行為）、②語（口）業（言語的表現）、③意業（意思の活動）の三業に分類されると手元の辞書に記されています。一般的には、業は「悪業」として、悪い行いをしたむくいを受ける文脈で用いられることが多いでしょうか。自分が造ってしまった業のむくいを、自分が受けなければならぬという意味で「自業自得」という言葉もよく使用されることです。

このことを踏まえて立川談志の言葉に戻ると、人間の悪い行いや愚かさを語って他人に笑ってもらうこと

で、その人間が承認されることを意味しているのではないかと思います。落語に登場するその愚かな人物は、一般的に批判、否定されるような人物であっても、笑われることによって、その人物の人生が肯定されるようなニュアンスでしょうか。少なからず、笑いが起こるということは、笑う側もその愚かさに共感できたり身に覚えがあるからだと思うと、多数の人と共通する業なのでしょう。私個人としては、立川談志の語録で「酒が人間を駄目にするんじゃない。人間は元々駄目だ」という事を酒が教えてくれるものだ」という言葉に恥ずかしながら共感したことです。

そこで、浄土真宗の教えの中で重要な「宿業」について触れたいと思います。「宿業」とは『歎異抄』第十三条にある言葉ですが、その前に第十三条にある有名な言葉を紹介します。



「さるべき業縁のもよおせば、

いかなるふるまいもすべし」

（『真宗聖典』六三四頁）

と、聞きなじみのある読者の方もおられると思います。

これは、因縁に促されて条件が整ってしまったならば、どのような行いもしてしまうということです。例えば、人殺しは悪いことだと分かっていても、戦争にいつて人を殺さなければならぬなど、悪いことだと分かっているにもかかわらずならぬ状況というものがあります。それぞれの立場や境遇によって、そうせざるを得ないことが生じるのは、戦争に限ったことではありません。また、行いの最中は「これが一番、最善のことだ」と思って取り組んでみたけれど、それによって悲しむ人が出てきて後悔したということもあると思います。

つまり、良くも悪くも、そうしなければならなかったという業を誰もが背負って生きており、そのことを悲観的に捉えるだけでなく笑いに転じて共感を生んだのが立川談志のすごさなのだと思います。

（続）

教えのバトンリレー

最近亡くなられた上岡龍太郎さんを偲ぶテレビ番組で、昔の対談が流れました。そこで上岡さんは、今まで憧れていた美空ひばりや石原裕次郎をはじめ、たくさんの人たちが亡くなった。この世の知り合いよりあの世の知り合いのほうが多くなる。そうするとあの世にいくことが怖くならなくなるためにみんなは死ぬのかと、そうすると僕にとって死ぬことは怖くなくなる、という旨のことを言っていました。

親鸞聖人が師と仰がれている七高僧の一人、道綽禪師がこのように仰られています。

前に生まれん者は後を導き、

後に生れん者は前を訪(とぶら)え

不意にこの言葉が思い浮かびました。前に死んだ人

間は生きている人間に教え、死んでいく自分は、その後を生きる人間を教える。死というものを考える一つの機会となっています。



行事予定

七月二十八日(金) 十時 親鸞聖人ご命日のお勤め

同朋会例会

(同朋会地区委員は十五分前に集合)